

一九八八年二月二十五日
印刷
発行



第71巻 第2号

史学・地理学・考古学

論 説

唐宋時代の短陌と貨幣経済の特質……………宮 澤 知 之 (1)

コンスタンティノープル330年……………栗 本 薫 (33)
——その実態と伝承の形成——

器財埴輪の編年と古墳祭祀……………高 橋 克 壽 (69)

研究ノート

ジームス社の東京電灯への融資計画……………竹 中 亨 (105)

書 評

西山克著『道者と地下人——中世末期の伊勢——』……………仁 木 宏 (129)

紹 介

Reginald George Golledge and Robert J. Stimson,
Analytical Behavioural Geography (小長谷一之)

史 学 研 究 会

京都大学文学部内

会 告

去る一月二十八日に開催された常務理事会において、次の案件が決定されました。

一、日本学術会議第一四期会員の候補者の選定

竺沙雅章氏

浅香 正氏

現理事の右記二氏を候補者として選定すること。

なお、会員の候補者の資格認定は三月二〇日までに通じがくることになっています。その後、五月中旬から六月上旬までの間に推薦人会議が開かれ、会員決定が行われることになっています。

日本学術会議だより

— No. 7 —

昭和六年二月一日 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る一〇月二一日から二三日まで第一〇三回総会（第一三期・六回目）を開催しました。今回の「日本学術会議だより」では、今総会で採択された報告を中心として、同総会の議事内容をお知らせします。本会議の第一三期も、余ところ九か月となり、各委員会は、期の活動の取りまとめに向けて一層活発に審議を進めています。

◇総会報告

総会第一日目の午前中には、会長からの経過報告、各部・各委員会報告に続き、報告・対外報告等四つが提案され、そのうちの二件が可決された。そのほかの二件に関しては、同日午後には各部会で審議が行われ、第二日目の午前中に一件が、第三日目の午前中に一件が可決された。

なお、総会前日の二〇日午前には連合部会が開催され、これらの案件の予備的な説明、質疑が行われた。また第二日目午後には「食糧生産と環境」についての自由討議（詳細別掲）が、第三日目の午後には常置委員会、特別委員会が開催された。

第一日目午前。まず、利根川進氏のノーベル生理学・医学賞受賞に対し日本学術会議第一〇三回総会の名において祝電を呈することが提案され、全員一致で可決された。

次に日本学術会議の行う国際学術交流事業の実施に関する内規の一部改正についての提案がなされ、これも賛成多数で可決された。この改正は、第一四期の当初三か月間における、国際学会への研連委員の代表派遣について、必要な経過措置を講ずるものである。

続いて、高齢化社会特別委員会提案の「日本高齢社会総合研究センター（仮称）の設立について」（勧告）の提案説明と質疑応答が行われた。さらに、医療技術と人間の生命特別委員会報告「脳死に関する見解」を「日本学術会議の運営の細則に関する内規」に定める対外「報告」として認めることに関する提案が行われた。これは同特別委員会がその発足以来二年間にわたって審議を重ねてきたものであり、前回四月の総会では討論の過程でさらに検討する必

要があるとして同特委により取り下げられたものである。その後、委員定数を増加するなどして審議を重ね、今総会に再度提案されたものであるが、批判的意見を背後に含む多くの質問が出された。

第二日午前。前日提案された「日本高齢社会総合研究センター（仮称）の設立について」（勧告）が、賛成多数で採択され、直ちに内閣総理大臣始め関係諸機関等に送付された。同じく前日提案の「脳死に関する見解」は、前日の部会審議で異論が続出したため、抜本的に書き改められたものが提案されたが、なおいくつかの疑問が示され、採決には至らなかった。

第三日目午前。再度修正された「脳死に関する見解」が提案された。国民的合意の形成、医学界における少数意見の存在などに關して、なお理解の不一致があり、質問討論が行われた。これら若干の点に關する討論者間の相互了解を遂げた後、数名の発言者から再度の修正を経ることによって本報告は異なった専門分野のいづれからみてもおおむね満足できるものになった、当初に危惧した点が除かれた、などの意見が述べられた。こうして多少の曲折はあったが、

最後に本提案がほぼ全員一致で採択された。（見解の内容は別項参照）

（中略）

◇脳死に関する見解

——医療技術と人間の生命特別委員会報告——

最近の医療技術の発展に伴って生じてきた人間の生命とその尊厳にかかわる諸問題のうち特に脳死の問題は末期医療、臓器移植等をめぐって大きな社会的問題となっている。医療の現場では脳死の状態に陥った多くの患者をめぐって、日夜その家族や医師が苦悩に満ちた対応を迫られつつある。脳死の問題は、必ずしも心臓や肝臓などの臓器移植との関連においてだけでなく、むしろ現実的には多くの場合、末期医療の現場において深刻化している。このような現状にかんがみ、脳死にかかわる諸問題を様々な角度から十分に議論し、問題の所在を考察して、その解決への展望を示したものである。これが本特別委員会の今回の報告である。

本報告は脳死を医学的に、法的にそして心理的、倫理的及び社会的側面から考察した。全脳の機能が不可逆的に喪失した状態

と定義される脳死は、医学的にみて個体の死を意味する。これは第七部会員の一致した意見であり、医学界の大勢と判断されるが、医学界の中にも少数ながら疑義を持つ者もある。脳死を人の死と認めるか否かについては、法律的にはこれを肯定、否定する見解が対立している。否定している場合にも脳死になった際、人工呼吸器を外してはならないということではなく、事情によっては違法性阻却ないし、責任阻却事由があり得ることまで否定するものでない。

人の死は単なる医学的現象ではなく、その人の人格、社会的存在にもかかわるものである。したがってその取扱いについては、本人の生前の意思、家族の感情、一般的倫理観、習俗、社会的慣習等を尊重しなければならぬ。しかし脳死をめぐっては三徴候に基づく伝統的な死の概念にとらわれることなく、深刻化している医療の現状に対処して新しい死の概念の確立に努めるべきであろう。このため関係方面において脳死をめぐる諸問題が検討され、速やかな解決への展望が開かれることを希望する。

以上の見解を第一〇三回総会の承認を得て対外報告としてこれを公表することとし

た。

(詳細は、日本学術会議月報一一月号を参照されたい。)

◇自由討議—食糧生産と環境—

この自由討議は、今期設置された「生物資源・食糧と環境特別委員会」のメンバーが主となり、個人の立場で、食糧生産と環境の問題について意見を發表したものである。

会長近藤次郎(食糧に対する環境からのアプローチ)、第六部、生物資源特委委員長阪本楠彦(食糧問題の展望)、第六部(以下すべて特委委員)武田友四郎(環境変化が農業生態系に及ぼす影響)、第五部岩佐義朗(水資源の立場から)の各会員がそれぞれに付記したサブテーマについて問題を提起した。これに続いて第三部大石嘉一郎(経済学の立場から)、第一部石川栄吉(数量主義の反省)、第六部水間豊(畜産学の立場から)、第二部及川伸(食糧管理制度について)、第六部福岡博保(栄養面から見た食糧資源開発問題)、第一部水津一朗(歴史地理学の立場から)、第七部小泉明(人口と食糧・環境)の各会員から関連発言があり、質疑応答が行われた。

一九七三〜八一年頃のいわゆる「世界食

糧危機」は既に去り、今や食糧の輸出競争が激化している。しかしアフリカ等の飢餓問題が解消したわけでは決してないし、開発途上国の所得増から来る食糧需要に決して樂觀を許さない。まるで、栄養過剰の大国に「追いつき、追い越そう」としているかのようにさえある。

生産の面でも、自然の節理を無視した増産が進められている。森や山に住む神々への迷信的な怖れを失った後、自然破壊に対してかけるべき有効な抑制力を、人類はまだ見出せずにいる。破壊された自然の復旧(砂漠の緑化など)もまだほとんどできないままである。(この自由討議は日学双書5刊として出版されます。)

昭和六二年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の受領について

昭和六二年度の史林の刊行費の一部として、文部省学術国際局から昭和六二年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)の交付を受けております。

編集後記

編集会議は二カ月に一度、委員長一名・委員八名でおこなっています。去年から月末の金曜日がほぼ定例化。午前十時に始まり、大抵は午後三時頃に終わっています。

委員になって三年。会議の雰囲気も微妙に変わってきたような気がします。その一つが、昼食休憩(会議室で仕出し弁当を頂きます)に一時間以上かけるようになった事。昼食後にはお茶を飲みながら談笑。この余裕がより良い編集につながっていったよいのですが。編集に関する忌憚のない御意見をお寄せ下さい。(光春)

一九八八年二月二五日印刷
定価一〇〇〇円
送料五〇円
史林 第七一巻第二号(通巻第三四八号)

京都市左京区吉田本町
京都大学文学部内

発行人 史学研究会

理事長 藤 縄 謙 三
京都市下京区七条御所ノ内中町五〇
中村印刷株式会社
印刷所

THE SHIRIN

or the

JOURNAL OF HISTORY

Vol. LXXI No. 2 March 1988

CONTENTS

Articles :

Duanmo 短陌 and the Characteristics of the
Money Economy in the Tang and Song Dynasties...*T. Miyazawa* (1)

The Foundation of Constantinople :
the Reality and the Legend*K. Kurimoto* (33)

Chronology of *Kizai-Haniwa* figures 器財埴輪
and Tumulus Rites*K. Takahashi* (69)

Note :

Zum Konzept des Finanzierungsgeschäfts von Siemens
mit *Tokyo Dentō* 東京電灯 um Jahrhundertwende.....*T. Takenaka* (105)

Book Review :

M. Nishiyama, *Dōja* 道者 and *Jigenin* 地下人 :
Ise 伊勢 in the Late Middle Age*H. Niki* (129)

Miscellaneous :

Published

by

THE SHIGAKU KENKYUKAI

(*The Society of Historical Research*)

Kyoto University, Kyoto, Japan

ISSN 0386—9369